



# 「知足」(足るを知る)に気づく

—「アフリカの温かい心」と呼ばれているマラウイ共和国を訪れて—

広島県呉市立呉高等学校

担当教科：英語

古本 弘子

◆実践教科：総合「産業と社会」

◆時間数：2時間

◆対象学年：高校1年生

◆対象人数：160名

## カリキュラム

### ココがすばらしい!

マラウイ出身の方に会えて、一緒にダンスをしたり、民族衣装を着たり、実際に触れるとても貴重な体験を生徒さんたちはできたと思います。

### ◆実践の目的

- ・マラウイの実状を知り自分たちの国の「知足」(“足る”を知る)に気づく。
- ・「命」を見つめ、その大切さを認識する。
- ・青年海外協力隊員の仕事を知り、隊員の方々の活動に対する情熱を感じる。
- ・見えないもの(愛、努力、思いやり、親切)の大切さについて考える。

## 授業の構成

	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
0	アフリカのイメージを探る	アフリカに対するイメージアンケート実施	・アンケート
1	マラウイを知る マラウイ共和国の概要	・アンケートの結果からアフリカの「プラスイメージ」と「マイナスイメージ」を挙げる ・マラウイの基礎知識(位置、気候、人口、言語、文化)を紹介する	・事前アンケート ・マラウイの概要資料
2	マラウイ出身フェリスタスさんと交流-① 1. 自己紹介 2. チェワ語でミニ会話	・フェリスタスさん自己紹介 ゲストの文化背景やキャリアを知る ・チェワ語に挑戦することで、現地の言語に親しみ興味を促進する	・チェワ語資料
3	マラウイを映像で観て知る	・マラウイの授業風景や村の様子、人々の暮らしを映像から知る ・写真に関する問いかけを入れ一緒に考える	・パワーポイント
4	マラウイ出身フェリスタスさんと交流-② 1. マラウイの文化を体感する 2. 荷物の運び方 3. 質問コーナー 4. 民族衣装体験	・フェリスタスさんにダンスを披露していただき、途中から生徒たちもダンスに加わる ・マラウイで荷物を運ぶ時、どういう運び方をするのか、見る ・チテンジを着る	・15kgの本が入ったバスケット ・チテンジ(布)、マラウイの文字が入ったTシャツ
5	世界に目を向けるために 1. ウィリアム・カムクワンバ君の話 2. 世界食糧デーについて 3. 最後に…	・ニュースになったマラウイに住む少年の話「マラウイで生きる」ということを考える ・飢餓に対する知識を深め、自分たちにできることを考える	・ウィリアム少年のニュースレポート ・日本国際飢餓対策機構の資料 ・まとめプリント

# 1 時限目 | マラウイを知る

授業を始める前に、以前実施したアフリカに対するイメージについてのアンケート結果を発表した。アンケート結果からは、1位 動物が多い、2位 貧しい、3位 暑い、というステレオタイプのイメージが多数を占めた。中には、「大変な環境の中で一生懸命生きているように思う」、「命を大切にする人が多い」という意見もあった。これらの少数意見を踏まえつつ、自分たちが抱いたアフリカイメージが今日の授業でどうチェンジするか生徒に問いかけながら授業を始めた。

内容については、資料をもとに、マラウイの概要を紹介する形式で進めた。

## アンケート項目

- ① あなたの最も大切なものは何ですか？
- ② あなたの尊敬する人は誰ですか？
- ③ あなたの夢は何ですか？
- ④ あなたはアフリカにどんなイメージを持っていますか？



AVホールでの授業風景

## 【マラウイまでの経路】

まずマラウイの場所を地図で確認し、どのような経路で到着するか、所要時間等を考えさせた。

- 予想：生徒はマラウイに行くということにも想像の範囲外で予想できなかった。
- 実際：東京→香港(3.8H)+香港→南アフリカ(13.1H)+南アフリカ→マラウイ(2.4H) = 19.4H

経路地での待ち合わせ時間を含めると、マラウイに到着するまでには28時間もかかる。

生徒達には地理的な遠さを実感させるとともに、その距離感がマラウイやアフリカ諸国に対するステレオタイプのイメージを作り出しているのではないかという問いを投げかけた。

## 【マラウイの概要説明】

### 「マラウイについて」

配布資料

マラウイは1964年7月6日イギリスから独立、現大統領は、ビング・ムタリカ

**地 理**：マラウイ共和国はアフリカ南部に位置し、ザンビア、タンザニア、モザンビークに挟まれた内陸国。  
面積は北海道と九州を合わせた大きさで、日本の約3分の1。人口は約1500万人、首都はリロンゲ

**国 民**：言語は公用語である英語(英語以外に現地語のチェワ語やいくつかの言語が使用される)  
マラウイ国民の大半はキリスト教徒

**環 境**：手つかずの豊かな自然が残っている。観光の最大のスポットはマラウイ湖。  
淡水湖では、世界で8番目、四国の1.5倍の広さでマラウイ国土の20%を占める。  
マラウイ最高峰は、ムランジェ山で富士山と同じ高さ

**気 候**：亜熱帯気候に属する。  
11月から4月までは雨季で、まとまった雨が降り、5月から8月は冷乾季ですごしやすい。  
乾季でも9月から10月は特に暑い。

**農 業**：おもな生産物はとうもろこし、たばこ、さとうきび。主食はシマでトウモロコシの粉を水で練って熱したもの。

**通 貨**：マラウイ・クワチャ

平均寿命：40歳

マラウイの概要を説明する中で、生徒のアフリカに対するイメージは崩れた。

「気温は年平均20℃で過ごしやすい」というところで、アンケートにあったアフリカイメージは覆された。生徒からは「アフリカはそんなに過ごしやすいのですか?」という声も聞かれ現実のアフリカとイメージのギャップに気付いたようだ。次に実は遠い国マラウイが自分たちにとって全く関係のない存在ではなく、身近にあることを伝えるために以下の情報を提示した。

1. マラウイの主要輸出品はタバコで、全品目の輸出による収入の50%を占める
2. 輸出先の20~25%は日本
3. コーヒーショップ「タリーズ」のロイヤルミルクティーにはマラウイの紅茶が使用されている
4. 「ミスタードーナツ」のボン・デ・リングには、マラウイのメイズ(トウモロコシの粉)が使用され、モチモチとした食感はそれによるもの

## 生徒の反応

- ・まさか自分たちの身近にマラウイがあるとは思わなかった。
- ・日本のものだと思っていたのが輸入されていたなんて知らなかった。

### 〈所感〉

生徒は、自分たちが口にすることがあるものとマラウイのつながりを実感できたことで、さらに身近に感じられたようだ。また、アフリカは暑い、砂漠だからというイメージから少し抜け出せたようだ。

## 2時限目 | マラウイ出身のフェリスタスさんとの交流

マラウイの文化を体験させ、身近なものと感じさせるために呉市在住のマラウイ人、フェリスタスさんを招いて交流会を実施した。

### 1. 英語による自己紹介

〈フェリスタスさんについて〉

出身：マラウイ共和国

家族：夫、娘（中学生）

職業：マラウイ→小学校の先生、日本→小学校でALTとして英語を教える

在日歴：2年

来日のきっかけ：農業機械工学を研究する夫の留学による

日本の印象：日本の食べ物は美味しい。何でも物が豊富にある。便利だ。

日本で困ったこと：マラウイの主食「シマ」が手に入らない。

日本でうれしかったこと：周りの人々の親切

日本でびっくりしたこと：マラウイの村では毎日お葬式があるけれど、ここでは一度も行ったこともなく、見たこともない。

### 2. チェワ語でミニ会話に挑戦

外国語というと英語しか触れたことがない生徒に対し、言語の多様性を実感する為にマラウイの現地語であるチェワ語体験の時間を設けた。

マラウイでは公用語は英語であり、小学校から英語で授業が行われている。しかし、家では現地のチェワ語が話されている。この点を抑えたいうえで体験に入った。

まず、フェリスタスさんに話していただき、全員で簡単なチェワ語会話を実践した。

#### チェワ語講座

A. こんにちは、お元気ですか？ Muli bwanji？ (ムリ バンジ)

B. はい、元気です。あなたは？ Ndirii bwino kaya inu？ (ディリヴィイノ カヤイス？)

C. はい元気です、ありがとう Ndirii bwino, Zikomo. (ディリヴィイノ ジコモ)

さようなら Tionana ティオナナ / ごめんなさい Pepani ペパニ

### 〈所感〉

今回、体験に重点を置いて実施した。今後の展開として、なぜ小学校では英語を使い、チェワ語を使わないのか、英語が世界の多くの国々で使用されるようになった背景、言語と植民地支配の関係を考える授業を実施したい。後日談として、駅でフェリスタスさんと生徒が出会えると、チェワ語で挨拶を交わすようになったという。この交流がなければ、生徒にとって彼女はアフリカの人であり、マラウイ出身であると意識することはなかった。ささやかな交流ではあったが、身近なところで国際交流の芽が出たようで本当に嬉しく感じた。

## 3時限目 | マラウイの映像を見る

生徒たちのマラウイに対する興味が高まったところで、改めて「先入観」について実感する為にフォトランゲージを実施した。その後、「いのち」について考えることを目的に写真でマラウイでの体験を振り返った。

### ・フォトランゲージ「何が読み取れる？」



まず写真を見せて第一印象を挙げさせ、そのうえで写真の背景を説明した。事実を知った後、どのような印象を持ったかなども問いかけた。

### ・いのちについて考える① 肉を食べるということ

生徒の関心を引いたのは、生きた地鶏を捌き食べるまでの過程の写真だ。これまで、意識することなく口に入れていた肉も、このような経路で自分たちの口に入っているのだということを認識できた。「一切れの肉にも一つの命がある」それに気づいたようで、食育につながったと感じる。



## ・いのちについて考える②



バスの運転手、  
マックスウェルさん

まず、生徒にバスの運転手として働く彼の生活を紹介した。その後、彼是我々が帰国してまもなく交通事故で亡くなったことを伝えた。命が有限であること、死というものは突然訪れるものだということを生徒に伝えるとともに、「命」の大切さを伝えた。

### 生徒の感想

机や教科書が無くても学ぶ姿勢は私達よりずっと真剣です。生徒皆が授業に参加している。学校で机や椅子があって勉強できるのは当たり前ではないんだ。机がなくても勉強はできる。授業に集中しようと思う。人の手がまな板変わりになり、トマトや野菜を切っているのにビックリしました。「Stop」と描かれたポスターがよく貼られていました。それが人身売買を止めるものだと知って驚きました。

### 〈所感〉

生徒たちは、マラウイの話聞いて知識は得ても先入観というものなかなかぬぐえないということをフォトランゲージを通して実感したようだ。一枚の写真にも見る人によって様々な意見が出ることに気づききっかけとなったと考える。

## 4時限目 | フェリスタスさんとの交流②

### 1. マラウイの文化を体感する

マラウイの人々は頭で荷物を運ぶ習慣がある。テレビで見かける光景を实际体験した生徒はいない。フェリスタスさんも20kgくらいの荷物は頭に乘せて平気で歩くことができるという。皆の前でAVホール内を歩いていただいた。何事にも消極的な生徒が多い中、生徒の自分でやってみようという気持ちを引き出すためにダンス体験を実施した。



### 〈所感〉

生徒は、テレビで見て情報を受け取ることが全てで、実践までつながらない。実践して初めて理解し、実感できることがあるということを伝えた。また、自分で挑戦してみる楽しさを伝えることができた。

## 5時限目 | 世界に目を向けるために

### 1. マラウイのホットなニュース

昨年11月、教師海外現地研修帰国から3か月たったある日、マラウイに住む少年のニュースが流れた。

## 東アフリカ・マラウイの少年が、独学で風力発電設備製作を実現

(<http://windpowerinfo.blog.shinobi.jp/Entry/89/>)

2002年の干ばつにより、農業を営んでいたウィリアム・カムクワンバ氏(当時14歳の少年)の父親は収入を失ったため、少年の学費が捻出できなくなってしまった。退学した少年は、図書館で本を読む中で、風力発電について書かれた本と出会った。

「本に写真が載っているのだから、だれかがこの機械を作ったということ。それならばくにも出来るはずだと思った」(本人：ウィリアム・カムクワンバ氏)

風力発電設備の製作には、ごみ捨て場から拾ってきた自転車の部品、プラスチックのパイプ、プロペラ、自動車のバッテリー、森で採ったユーカリの木(タービンを支えるポールに使用)を用いた。

「風車を作るんだと話す、だれもがほくを笑った。あいつは頭がおかしいというわさが、村中に広がった」(ウィリアム・カムクワンバ氏)

少年は製作開始から3か月後に、最初の風車を完成した。

「これでもう頭がおかしいなんて言われないうと思、ほっとした」(ウィリアム・カムクワンバ氏)

その後7年間で、風車5台を製作。(最大のもは高さ11m余り)発電電力は、水汲み用の電動ポンプを動かしている。また少年は、地域の学校でも風車作りを指導し、その校庭に発電設備1台を設置した。村人たちは、携帯電話の充電や、ラジオの視聴を目的に、少年の自宅をたびたび訪問している。この少年の挑戦は、世界各地から、称賛を受けている。

世界最貧国と言われるマラウイにも、政府や支援団体に頼らずに自分の力で問題解決の道を切り開く新たな世代が育っている。これまでのアフリカは貧しいからこちらが助けてあげなければいけない立場にあるという思いが強かったようだが、ウィリアム君のように学ぶ場所がないなら独学するという姿から貧しいからかわいそうではない、彼らにもプライドはあるということを知ってほしかった。恵まれた環境、整った状況だけが人間を育てるのではなく、その人のやる気こそ大切であるということ伝えるためにこのニュースを取り上げた。

### 生徒の感想

無いものは作る工夫をしているのがすごい。ものがなくてもできることはあるんだ。

### <所感>

生徒と同じ世代のマラウイの少年の話から、生徒自身の授業への取り組み方、生きるということについて意識が向き始めたように感じる。「不足」に対して、自分たちができること、要求を外に向けるのではなく、自分の中に目を向けることができるような問いかけをしていきたい。

## 2. 飢餓の問題

これまで、アフリカ大陸にあるマラウイという国の中には色々な豊かさがあることを生徒に伝えた。

その一方で、同じアフリカでも飢餓に苦しんでいる国もある。先に「いのち」をいただくこと、大切さについて学んだ生徒に対し、改めて飢餓について考えてみることにした。

昨年11月15日、広島女学院中高等学校において、世界食料デーにちなんだイベントが開催された。

その際に入手した情報を元に「飢餓」について話をした。

日本国際飢餓対策機構によると世界では、4秒に1人、1分間に17人が飢餓で死亡している。その一方で、自給率41%の日本は3億人分の食料を輸入して、1億人分の食料を廃棄している。1億人分の食料はなぜ廃棄されるのか、自分たちの食について振り返るよう呼びかけた。

### 生徒の感想

わたしは、食べ物を残したりしていないけど、こんなに無駄がある。なんでだろう。  
食べ物を大切にたべたい。

### <所感>

今回、時間の都合で問題提起だけで終わってしまった。今後は、なぜ輸入に頼っているのか、世界の富や食糧のバランスについて考える授業を展開したい。

### 3. 生徒に伝えたマラウイから学んだ3つのこと

#### ①知足(足るを知る)について

学校へ行くことができる、教育を受けられる、電気がある、水がある、食べ物がある、病院がある。今、私たちの生活で当たり前だと思っていることは、決して当たり前ではない。「あるということ」に感謝の気持ちを持つ大切さを伝えた。

#### ②命の大切さ、今を一生懸命に生きるということについて

平均寿命が41歳というマラウイの現実。そして、現地でお世話になったマックスウェルさんの突然の死を経験したこと。また、どんな環境にも負けないで、今置かれた立場の中で一日一日を精一杯生きる青年海外協力隊員の姿を見たこと。環境に揺るがない「にもかかわらず」の精神に心をうたれた。

生徒達には、今を生きることの大切さを実感してほしいと願い、思いを伝えた。

#### ③見えないものこそ大切であるということ

「愛や努力、思いやり、親切」は目に見えないが、その中にこそ大切なものがあるのではなからうか。「あなたにとって大切なものは何ですか?」という問いに多くの生徒は、家族や友人、命と答えた。しかし、マラウイでは、教育や学校、神様(祈り)が大切であるという答えが多数を占めた。

生徒は、特に「神様」という答えに驚いたようだ。同世代の若者が自分たちが全く想像しなかったものを大切に思っているという事実に世界には色々あることを感じたようだ。

最後に、生徒に「これからあなたたちはどう生きるか?」問いかけた。

私自身が好きな言葉、"Life is a gift. What you do for it, thank you note"を紹介し、一人一人の人生は天からの贈り物であなたが、その贈り物に対して「何をするか」が大切なのだという言葉を紹介した。今日の授業で、マラウイという国を知り、またそこに暮らす人々の姿を通して何を感じ、考え、これからの自分にどう生かすのか考えてほしいと伝え、「時間は、有限だが、使い方は無限だ」という言葉で締

## 成果と課題 (全体を通して)

「マラウイを知り、生徒自身がどう感じてどう変わるか?」、知ることが自分たちをどのように変化させるのかを実感してほしいという思いでこの授業を組み立てた。生徒の感想から、たった数時間の授業ではあったが、知ることによって広がる世界があることに気づいてもらえたと感じる。

生徒が最初に抱いていたアフリカのイメージはきっとテレビ等の情報で想像したもので、外から観たイメージが強かったかもしれない。しかし、今日はマラウイという国の中を観て知ることができたと思う。マラウイという国を知ることによって、生徒の世界観が広がったのではないかと感じる。今の自分達の生活を少しでも振り返ることができるきっかけになったと感じる。他国を知ることによって、自分の国の良い面や問題点に気づくことができる。マラウイという国の現実を知ること、自分たちが当たり前だと思っていたことが、実は有り難いことなのだ気づくこと、不平不満を持つ前に自分がどれだけ恵まれた環境にいるのかを感じた生徒も多かった。

感想文を読むと、多くの生徒が「命の大切さ」を感じてくれていた。生徒の言葉の中に今日という日がかけがえのない一日であると改めて思ったとあった。当たり前だと思っていたことに感謝できたことは大変良かった。また、周りの人や日々の食事など些細なことに感謝するということが大切であると気づいた生徒もあった。

授業は地図上でマラウイを知ることから始めたが、授業を通してマラウイに行ってみたくて、働いてみたいという意見もあり、マラウイが心の線で結ばれたような気がして幸せな気持ちになった。

今のこの気持ちを大切にしてもらうためには、これからももっと世界に目を向けて、様々な国を知り、自分にできることを考えてほしいと考える。

課題としては、限られた時間で内容を詰め込みすぎた。伝えたいことが多すぎて、伝えることに意識が集中してしまった。今回は国際理解教育の導入として160人の前で主に講義型で授業を実践した。そのため、一方的に話す場面が多かったが、今後は少人数で体験型の授業を設定したい。

## 参考資料

### 【インターネット】

- ・「在日本マラウイ大使館」 <http://www.malawiembassy.org/jp>
- ・「マラウイ地図」 <http://www.ncm-center.co.jp/tizu/marau.html>
- ・「外務省-マラウイ共和国」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malawi/data.html>
- ・「風力発電のニュース記事を読む」 <http://windpowerinfo.blog.shinobi.jp/Entry/B9/>
- ・「The Boy Who Harnessed the Wind」 <http://williamkamkwamba.typepad.com/>